様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：５８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０２０２

研究課題名（和文）近代における琵琶と諸芸能―新ジャンルの形成と現代への継承―

研究課題名（英文）BIWA and Various Performing Arts in Modern Times ; Its Legacy and New Genres Created in Modern Times

研究代表者
澤井　万七美（SAWAI, Manami）

沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：６０３３０７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代において琵琶が多様な芸能（演劇・映画・講談・お伽噺・童謡・舞踊など）と接近し、新たなジャンルを創出してきたことを明らかにした。いくつかのジャンルは、第二次世界大戦を境に失われたが、今日もなお継承されているものもある。また、これらは琵琶の演奏に演劇性を付与したという点でも重要であると言える。

研究成果の概要（英文）：I investigated that BIWA approached to various paerforming arts(theater,movie,KOUDAN(a kind of speech performance),japanese traditional fairy tales,nursery song,dance, etc.), and created new genres in modern times.Some of them had lost after World War Ⅱ,but several genres keep their lives today.I also think that they are so important for the addition the dramatic viewpoint to the BIWA perfomance.

研究分野：芸能史

キーワード：琵琶　近代　芸能　異分野　交流　教育　大衆

１．研究開始当初の背景

琵琶に関しては、これまで音楽学の領域で先行研究が多くなされており、日本音楽／邦楽の事典類や啓蒙書の一節には必ず琵琶の項目が立てられていた。大陸からの伝来に始まり、日本においてどのように受容され、伝来してきたかを通論は、着実に積み上げられてきている。

また、九州各地を中心に、その土地固有の伝承芸能として、民俗学の観点からの琵琶の調査も複数の自治体（熊本県など）によって行われてきた。

近代における琵琶に関しては、入江寿紀「明治の筑前琵琶」（一）～（九）（『西日本文化』昭和４８年（１９７３）１月～昭和４９年（１９７４）２月）・倉田喜弘「忘れられた琵琶ブーム」（上）（下）（『西日本文化』昭和５０年（１９７５）６～７月）に取り上げられている。ただしこれ以降、当時の人々にどのような形で受け入れられ、楽しまれてきたのかという論は、あまり光が当たってこなかった。

研究者は、前任校在職期に山口県下の郷土芸能に関する資料を収集しており、そこで知った「琵琶劇」に着目した。いわゆる中央で知られている通説と、地元での伝承に落差があったためである。地元の郷土史家・佐藤治氏が編まれた『戯場関遠近（いばいごやせきのおちこち）』他の郷土史誌の記述・山口県下で発行されていた地方紙・琵琶劇の劇団「紫潮会（しちょうかい）」公演のあった東京や関西の新聞の記事を突き合わせてみることにより、近代芸能史からこぼれおちていたひとつの芸能の足跡、そして芸能史研究における「中央と地方」との問題の一端を明らかにすることができた。

これをきっかけに、近代における琵琶に関する調査を始めたところ、思いがけないほどに多様なジャンルの芸能との接近・融合が試みられてきた実態が見えてきた。そうした近代琵琶の実態を、各分野の研究者と情報交換をしながら研究を進めてゆくことにより、各領域の枠を超えた発展が可能であると考える。

２．研究の目的

本研究は、近代芸能としての琵琶の動向を明らかにすることを目的とする。特に、「諸芸能との融合による新ジャンルの形成」に焦点を当てる。

（１）諸芸能との融合と新ジャンルの形成

講談・舞踊・剣舞・お伽噺などの数々の芸能との交流の事蹟を掘り起こし、どのような新しい芸能ジャンルが生まれたのかを検証することで、明治末から昭和初期の芸能に対する新たな視座が得られるものと考える。

（２）現代の琵琶への影響

こうした新ジャンルの形成は、琵琶そのものへの認識や弾奏法にも何らかの影響を与えたものと考えられる。近代の動向が現代の琵琶に遺したものとは何か、実演者への聴き取りをも実施しつつ探ってゆく。

３．研究の方法

本研究は、次の２つの方法によって進めてきた。

①資料調査（明治末から昭和初期）
②琵琶弾奏家からの聴き取り調査

①については、国立国会図書館所蔵の雑誌『琵琶新聞』『水聲』、および戦前に発行された琵琶の教本、各新聞の芸能欄にみられる琵琶関連の記事を収集してきた。なお、2014 年度末に、武蔵野音楽大学教授の薦田治子氏の御厚意により、『琵琶新聞』『水聲』の電子データを頂くことができた。また、錦心流一水会からは現行の各種琵琶歌本を御寄贈頂いた。さらに、映画研究者の世良利和氏より、おそらく琵琶伴奏付きではないかと推測される大正期のアニメーション映画のフィルムを提供して頂いた。

②については、薩摩琵琶では田中錦煌（きんこう）師に、聴き取り調査ならびに音源提供の機会を得ることができた。また、錦心流一水会を通じて、新たに聴き取り可能な弾奏家を紹介して頂いている。筑前琵琶では田中旭泉（きょくせん）師に、主に文書を通じて聴き取り調査を継続している。

４．研究成果

（１）演劇・活動写真／映画

明治末期、山口県下関市において琵琶と演劇とを融合させた「琵琶劇」が誕生したことは１．で述べた通りである。次いで活動写真／映画（無声）の伴奏として登場するようになった。演劇・映画ともに、そこに出演することについては内部から激しい非難の声が浴びせられた。当時の言辞によれば、それは「高尚」なる琵琶を金で売るという卑しい仕業でしかない、とみなされたのである。しかし、映画の隆盛とそれに伴う実入りの良さが内部にも認知されるにつれ、そうした批判的な声は次第に沈静化してゆく。大正期にさしかかると、「活動写真付きの琵琶師になりたいがどうしたらよいか」という相談が『琵琶新聞』（第１２５号、大正８年（１９１９）１１月）に掲載され、編集部が「今売れているのはこういう人たちで、このような状況である」と懇切丁寧な回答をしているほどである。琵琶は、日本ものの作品だけではなく、ときには西洋ものにも演奏され、特に違和感なく受け入れられていた。特定の映画会社専属の琵琶弾奏家はいなかったという。『琵琶新聞』の記事を辿ってゆくと、映画に曲を付けるプロセスや具体的な給金の額など、驚くほど率直に明かされている。これまで無声映

画の伴奏者の具体的な報酬や音をつける過程などは、映画研究者の間でも実態が知られていなかったとのことで、短期間ながら関わりのあった琵琶界の資料が日本の映画研究の一助にもなったと言えよう。

トーキー普及以降は、伴奏音楽全般が衰退してゆく。ただし、少数ではあるが、トーキー映画にも琵琶を取り入れた作品が存在している（オールトーキー琵琶映画『石童丸』石山稔監督、前田錦月弾奏、大都映画、昭和１３年（１９３８）封切）。

日本からの移民が多数在住していたハワイにおいても、琵琶伴奏付きの映画上映会や琵琶の演奏会が開催されていたことが『布哇報知』の広告（昭和７年（１９３２）３月１４日付ほか）からも窺い知ることができる。海外への普及活動については、他芸能とのコラボレーションも含め、今後さらに調査を進めるべき領域のひとつと考えている。

（２）講談

演劇および活動写真／映画との融合への批判に対し、反論する側が掲げた旗印として、「大衆」・「教育」・「家庭」という文言がある。

近代における中央進出の先陣を切った薩摩琵琶が、そもそも武士（および町人）の精神修養を修業の眼目に据えていたことから、一般への普及のために他の芸能と手を結ぶことや女性の弟子を増やすことに抵抗感を示す傾向は確かに強かった。しかし、北九州から出た筑前琵琶が、他の邦楽の摂取や女性層の積極的な取り込みという柔軟性をもとに着実に勢力を伸ばしていった状況下、薩摩琵琶も表現方法の模索に目を向けることになっていったのである。

大正初期、岡山出身の水也田呑洲（みやたどんしゅう）が、独自の新ジャンルを創始する。それが「琵琶講談」である。この琵琶講談には、２つの冠が存在していた。ひとつは「教育」である。『琵琶新聞』の年頭挨拶・暑中見舞いの広告欄等には、「水也田流琵琶宗家教育琵琶講談開祖」（大正１１年（１９２２）１月）といった名乗りを掲げている。もうひとつが「大衆」である。昭和９年（１９３４）頃の琵琶大会では「大衆芸術琵琶講談／宗家　水也田呑洲」を標榜している。

水也田呑洲は、東京音楽学校で西洋音楽を修めたという経歴の持ち主で、琵琶の楽器としての改良や、舞踊・演劇的な要素の摂取も試みていた。一方では伝統を踏まえた琵琶歌本を刊行し、技倆面での評価も高い。彼が手がけた琵琶講談のレパートリーは、忠君愛国もの、また『塩原多助』などの人情ものである。批評によれば、水也田呑洲はその美声のみならず、人物の語り分けにも優れていたという。彼は、当時琵琶が最大のライバルとして敵視していた浪曲の節回しも参考にしたと公言していた。琵琶講談の初回公演に対して「浪花節そっくり」との非難が見られ、また現在残されている音源についても浪曲研究者から「浪曲との境界をあまり感じさせない」との感想が寄せられている。

その活動の基底には、琵琶を「浄瑠璃や浪曲と同様に、大衆に歓迎されるもの」（『琵琶新聞』第３０７号、「三十余年間　歩いて来た道（其一）」（昭和１２年（１９３７）３月）にしたいという意思が貫かれている。その冠が「教育」から「大衆」へ変化していった背景には、あるいは上から一方的に啓蒙しようという構えをあえて崩したいという考えがあったのではないか。

この琵琶講談は、弟子も含めて何人かの弾奏家が弾奏していた記録は見えるものの、第二次世界大戦を機にその系譜は途絶えてしまう。軍談をテーマにした作品が多かったということも要因であろうが、水也田呑洲という創始者の個性が際立っていたがゆえに、その衣鉢を継ぐ者が育たなかった可能性も否定はできない。

（３）お伽噺・童謡

現在への継承という観点でいえば、このお伽噺・童謡を琵琶にアレンジした「お伽琵琶」、「童謡琵琶」は注目すべき存在である。大正７年（１９１８）頃から上演記録が見え、今も薩摩・筑前両派で用いられている飯田胡春作詞の『お伽琵琶歌集』が刊行されたのは大正８年（１９１９）である。

誕生の背景を探ってみると、まず浮かび上がってくるのが女性層への浸透策である。実は、琵琶教師が弟子に対して風紀上問題ある行動をとるという事態がたびたび世間を騒がせており、琵琶界はそうしたマイナスイメージの払拭に頭を痛めていた。そこで打ち出されたのが、琵琶は「教育的効果があり、家庭音楽として最適」というイメージ戦略であった。巷にあふれる他の邦楽が男女の色恋を扱っているのは怪しからん、琵琶はそういう内容のものはない、と力説し、女性→家庭→子どもへとそのターゲットを広げていったと考えられる。

折しも学校制度の整備が進み、文学・音楽・演劇各界においても「児童」「教育」をめぐる運動が活発になっていた時期である。学校への出張公演において、旧来の琵琶が子どもたちにはなかなか受け入れられない現実に直面したことも相俟って、子ども向けの琵琶歌の必要性が痛感されていたことも大きい。飯田胡春の詞は、子どもたちの口ずさむ童謡の文言を意識して書かれているものが多い。ただ、節付については、学校で普及しはじめた西洋音楽（ピアノ・オルガンなど）の音階に最初から慣れ親しんだ子どもたちの感性に合ったものは、なかなか生まれない―ということを、学校教師でもあった弾奏家・橘愛水が「お伽琵琶愚感」という随筆ののなかで指摘している（『水聲』第４３号、昭和３年（１９２８）７月）。

それでも、歌詞のわかりやすさ・親しみやすさについては、子どもだけではなく一般の

大人たちにも琵琶に親しみを覚える契機にはなった。現在も、子どもや初心者への手ほどきとしてこのお伽琵琶の稽古がなされている。

このお伽琵琶に加え、大正半ばからは新しい歌（『靴が鳴る』『おさる』等）をアレンジした「童謡琵琶」も生み出された。お伽琵琶よりもさらに口語に近く、歌詞も七五調によらないシンプルな現代詩といって良い形式である。この童謡琵琶は、愛らしい子どもや少女の舞踊とセットで上演される例も数多く見られた。こちらも現在多くの弾奏家によって演奏されている。

（４）舞踊

琵琶舞踊については、広く言えば演劇との融合の初期形態であると捉えることもできる。山口県下関市発祥の琵琶劇団「紫潮会」のごく初期の公演が「琵琶演舞」と謳われていたように、もともと音楽に合わせての演技は、舞踊性が欠かせないからである。

『演劇百科大事典』（平凡社）の「琵琶劇」の項目で、最初の琵琶劇と紹介されているのが「嵯峨舞」である。名称は「舞」ではあるが、目指すところは演劇であった。大正１１年（１９２２）に嵯峨玉輪が創始し、能楽を手本としながらも「琵琶独特の芸術味」を凝縮した「楽劇」であると謳っている（「嵯峨舞に就て諸兄に告ぐ」『琵琶新聞』第１６２号、大正１１年１２月）。

先述した琵琶講談の創始者・水也田呑洲も明治４５年頃に「琵琶舞楽」なるものを手掛けたことがあると述べている（「十年後と今後の琵琶（一）」『琵琶評論』大正１５年（１９２６）１０月号）。

「琵琶舞曲」の創設を試みたのは小野寺江水なる人物である。在来の日本舞踊は恋愛ものが多く家庭向きではないため、「気品ある科白」を選んで多様な楽曲を取り入れた琵琶歌を作り、舞をつけたという。大正７年（１９１８）の試演に対する批評では、上品な路線を目指していることは理解できるものの、歌詞が義太夫に似ている、舞が常磐津そのまま、熟練不足など評判は芳しくなく、以後の活動記録は現時点では見えない。

童謡琵琶の添え物としてスタートした少女中心の舞踊は、昭和初期に盛んに演じられた。筑前琵琶の大坪旭邦の流派「旭邦会」では、「琵琶部・舞踊部」という組織立てをしていたほどである。

大正期に生まれた多くの試みにおいては、あまりにも多くのジャンルを取り込もうとしたことが敗因ではないか。琵琶という楽器の特色がわからなくなってしまうほどのアレンジや、その音楽性にそぐわないと琵琶愛好者が感じた性質の舞踊の摂取は、結局はどの層にも浸透し得なかったと言える。

付言すると、現代ではクラシックバレエと琵琶のコラボレーションも生まれている（古森美智子バレエ団×筑前琵琶「月に魅せられて」http://www.komori-ballet.jp/18　ほか）。

（５）歌劇

日本独自の歌劇に関しては、坪内逍遥が『新楽劇論』（明治３７年（１９０４））でその必要性を説いており、国内で様々な試みが行われていた。

琵琶界では、大正７年（１９１８）、ヴァイオリン奏者の小野寺萩園が「琵琶歌劇協会」を創設した。独自の琵琶を考案して西洋風の歌劇にも適するようにし、男女ともに歌劇を志す学生を募集する旨を『琵琶新聞』第１１３号で披露している。ヴァイオリン、マンドリン、笛、太鼓、鼓、トライアングル、カスタネットなど、多種多様な楽器を一緒に用い、節付は謡曲・長唄・義太夫・常磐津・清元・浪花節などから抜粋して琵琶歌に仕立てたというものであった。さらに小野寺萩園は、翌年「琵琶歌劇に就いて中橋文相と語る」（『琵琶新聞』第１１６号）において、己の理想「一般大衆に共鳴する国民音楽とその浸透」を相当な長文で述べている。だが、実際の舞台については未詳である。

琵琶と歌劇に関しては、昭和の映画女優として名高い田中絹代が所属していた「琵琶少女歌劇」が『少女歌劇の光芒』（倉橋滋樹・辻則彦、青弓社、２００５年　第２章）でもよく知られている。戦後しばらくの間は、大阪のファンが「琵琶劇の絹代」と声をかけることもあったという。今回、関西の資料の収集が進まず、この劇団については十分な考察を行うことはできなかった。

類似の存在として、昭和初期に「京王閣琵琶舞」がある。１２、３歳から２０歳前後の女性ばかりの劇団で、宝塚に似た劇団であったという。具体的なレパートリーについてはまだ手がかりが得られていない。

同時期の少女たちを主な演者とした歌劇との比較という観点からも、このジャンルについては継続的に調査していかなければなるまい。

（６）剣舞

大正半ば、幼い少年の舞を伴う「琵琶剣舞」を掲げた弾奏家に、犬塚士道がいる。

剣舞に関しては、昭和初期に琵琶と結びつきが非常に強くなる詩吟が大いに関わってくる。『琵琶新聞』等においても、昭和期には詩吟の会や教本の広告が飛躍的に増加している。詩吟に関する調査研究については、本研究期間では十分行うことが出来なかった。今後の課題としたい。

（７）総括

以上、本研究に関係する主なジャンルについて振り返ってきた。

これらが形成されたことによって、琵琶という音楽にどのような影響があったのか。それは、何より「弾奏における演劇性」を重んじる考え方が生まれたことである。琵琶と演

劇が融合し、それが邪道なものとして排除される風潮が薄らいできた大正期以降、弾奏において人物像の解釈や心理表現に関する言及が、各種の教本や『琵琶新聞』等の解説欄で数多く誕生している。それを表現するための細やかな旋律の工夫も付随して磨きがかけられていった。
　もし琵琶が異ジャンルとの融合をはかることがなければ、今日のような弾奏とは違ったものであったのではないか。

（８）今後の展望
　「３．研究の方法」①②を融合した研究成果については、学会での発表のみならず、広く一般にも開かれた形で行いたいと考えている。そのひとつが【復活上演】である。上にあげたアニメーション映画に琵琶伴奏を付けた形での上映会、また現在ではほとんど上演されていない子ども向けの「お伽琵琶」レパートリーの再演など、この４年間で知遇を得ることができた弾奏家の方々の御協力を仰ぎつつ実現したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①澤井　万七美
大正から昭和初期のお伽琵琶
2015（掲載確定）
近現代演劇研究　Vol.5　p49-67　査読有

②澤井　万七美
下関「紫潮会」の琵琶劇
2011
近現代演劇研究　Vol.3　p15-29　査読有

〔学会発表〕（計　2　件）
①澤井　万七美
大正から昭和初期のお伽琵琶
2014.05.31
近現代演劇研究会
於　大阪大学

②澤井　万七美、土田　牧子、寺田　真由美、横田　洋
庶民が親しんだ芸能の諸相　―明治から大正へ―
（ラウンドテーブル　担当：近代日本における琵琶と諸芸能　―普及活動の様相―）
2012．07．07
東洋音楽学会（招待講演）
於　国際基督教大学

〔図書〕（計　2　件）
①澤井　万七美　他
森話社
忘れられた演劇
（共著　担当:琵琶劇とその周辺)
2014　p93-128

②澤井　万七美　他
京都市立芸術大学日本伝統音楽センター
近代における音楽・芸能の再検討Ⅱ
（共著　担当:水也田呑洲の琵琶講談）
2012　p37-46

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
澤井　万七美（SAWAI Manami）
沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授
　研究者番号：６０３３０７２６